

な

ご

み

っ

う

し

ん

発行日：平成 30 年 7 月 23 日（第 43 号）

発 行：島田療育センターはちおうじ

「奇跡がくれた宝物」ーいのちの授業ーのあとがきを紹介します。  
私が、ーいのちの授業ーを始めたエピソードが書かれています。

所長 小沢 浩

### ～あとがき～

この物語は一つの電話から始まった。天城中学校の校長先生からであった。

「愛することからはじめよう」（大月書店）。この本が私と天城中学校を再びつなげてくれた。この本は日本で最初の重症心身障害児施設の園長となった小林提樹のことを紹介した本である。障害をもった子どもたちのために人生を捧げた小林提樹。その生き様を知った校長先生が、母校での講演会を企画してくださったのである。私はそのときに、「いのちの授業」をさせたいとお願いした。

まず私に浮かんだのは、自らいのちを絶った仲間のことであった。

子どものときに漠然としていた「いのち」。自分のものだと思っていた「いのち」。だが、親になり、子どもの「いのち」はわが「いのち」よりも大切なものであるという感情が湧いてきた。自分の「いのち」と引き換えにわが「いのち」を投げ出す親も多いことだろう。そんなことを考えた時に、改めて母に愛おしさがつのった。

生きたいと思いながら天国に旅立っていった子どもたちもいる。そんな「いのち」に、天城中の生徒に向き合っていたほしいと思った。

そしてできた形が「奇跡がくれた宝物ーいのちの授業ー」であった。

親御さんへの手紙では、「はじめまして」と書いたが、実ははじめてではなかった。子どもたちの親御さんは、私の中学時代の同級生、先輩、後輩であった。作文の温かいメッセージは、親御さんが私に送ってくれたメッセージでもあった。また「いのちの授業」には仕事を休んで駆けつけてくれた同級生がいた。夜には、恩師、同級生が急遽集まってくれて同窓会を開いてくれた。私は、「いのち」の温かさだけでなく「天城」という故郷の温かさにも触れたのであった。



『奇跡がくれた宝物』  
小沢浩 著

クリエイツかもがわ  
より発売中